

川瀬巴水 旅情詩人が描く四季と風景

SOMPO 美術館（西新宿）

2021. 10. 02～12. 26



「川瀬巴水」（かわせはすい）（1883～1957）は、日本画家「鏑木清方」門の画家で、“新版画の立役者”とされているのは、画家・刻師・摺師との協同によって制作され浮世絵の技術を継承しつつそれを超克する、版画に関心を示す肉筆画から誕生したものである。画家は、生誕地の東京の他、全国を旅して風景を写生し、版元と組んで「600点」を超える「新版画」を残してその画業は「昭和の広重」と称される。

《芝増上寺》（1925年）：増上寺の三解脱門をやや右目に大きく描き、その手前に左に傾いた一本の松の木を配した構図で、舞振る雪のなか傘をつぼめて歩く一人の女性が描かれて、門の大きさや松と門の距離感が把握できる。（左）

《馬込の月》（1930年）：現在の東京都大田区馬込二丁目の天祖神社境内にあった大きな松を描いた作品は、雲が満月をかすめる夜空に三本の松が亭亭と聳える絵画のような情景を版画によりリアルに再現されている。（右）



《こま形河岸》（1919年）：駒形橋・吾妻橋間の隅田川西岸河岸で営業する竹屋を描いた作品は、真夏の午後の写生に基づいて制作されたものである。竹束が壁となり風景が遮断されているが、逆三角形に空いた竹束の間から見える対岸街並みや太陽に反射して煌めく水面、雲の浮かぶ空の風景が気分を解き放ってくれる。



《麻布二の橋の午後》（1921年）：現在の港区を流れる古川に架かる二の橋付近の日暮れに近い風景を描いた作品で、画面右側に建つ家並みに西日が当たり、西側に建つ左側の家が影になっているため下流の風景と思われる。3月の柔らかい西日が当たる木造の家並みの淡く明るい色調と、日影となる家並みの少し強めの暗い色面とのコントラストが美しい。